

# 防災サークル「てくと」をはじめとする学生の防災活動 ～若者の防災意識向上に対する学生からのアプローチ～

小山司 山本優奈 北辰大空 齊藤大河 糸島颯太 湯浅恭史 松重摩耶 上月康則  
徳島大学防災サークル てくと

## 1. 研究背景・目的

徳島大学が位置する徳島県は南海トラフ地震による被害が強く懸念されており、被害想定\*1では徳島県内の死者数は3万人を超え、国内で6位となるとされている。

災害リスクが高まる一方、若者の防災意識の低さが近年問題になりつつある。内閣府による調査で、大地震および風水害に備えている対策を聞いた質問において、「特に対策は取っていない」と答えた人のうち、18～39歳の若者から大人にかけて対策をとっていない人の割合は4割を超え、他の年齢層に比べて高いことがわかっている。

徳島大学では今年度、防災サークル「てくと」(以下「てくと」とする。)が設立され、徳島大学環境防災研究センターが保管する防災用品の使い方を学ぶほか、学内外の防災イベントへの出展、SNSでの情報発信を主な活動内容とし、学生側から防災力向上を目指そうと活動が行われている。

本研究では、てくとをはじめとする若者の防災意識向上に向けて徳島大学内で行われている学生主体の防災活動について、その報告を行うとともに、徳島大学の防災教育において防災力向上に効果的な環境を検討する。また、徳島大学生の防災力の現状を明らかにし、若者の防災意識向上に向けた、学生からのアプローチの方法を模索することで、学生の防災活動の次年度以降の活動に生かすことを目的としている。

## 2. 研究方法

2024年5月26日に徳島大学常三島キャンパスで開催された学祭「五月祭」にててとが団体として初めてイベント出展し、非常食や簡易トイレ、段ボールベッドなどの防災グッズの展示や防災に関するクイズを行った際、来場者40名を対象に防災に関するアンケート調査を行った。

また本カンファレンスへの参加に際し、てととのメンバー8名を対象に大学の防災活動や、メンバーとしての防災意識についてアンケート調査を行い、7名から回答を得た。

## 3. 結果

### (1) 五月祭への出展・アンケート調査

まず来場者に対して展示を見て備えようと思ったものを質問した結果が下の図1である。

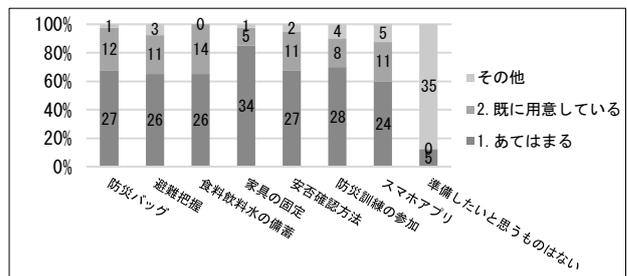


図1 てととの展示を見て備えようと思ったもの(n=40)

ほとんどの項目について「既に用意している」と回答したのは、回答者のうち約3割にとどまっていた。しかし展示を見る前後での防災に対する意識の変化については、回答者のうち約63%が「より積極的に備えようと思った」と回答した。

さらに「良かった点と改善点」について自由記述式の回答で得た文章を、KH Coderを用いてテキストマイニングで分析した結果が図2である。

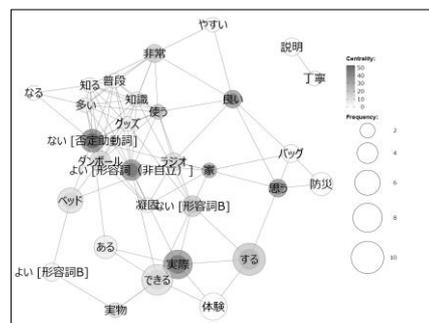


図2 良かった点と改善点の回答に含まれる語の共起ネットワーク図

図2において「実際」「する」「できる」「体験」といった単語が多いことや、「ダンボール」「ベッ

ド」「ラジオ」といった具体的な防災グッズの名称も出現していることを踏まえると、実体験を伴う展示は防災意識の変化をもたらす方法として効果的であることが分かった。

(2) てくとメンバーに対するアンケート調査

「これまでの活動を踏まえ、てくとの活動は自身の防災力向上に役立っていると感じるか」という質問に対して、回答者7名のうち5名が「そう思う」「どちらかというと思う」と回答していることから、てくとの活動は、防災力の向上を実感する手助けになると考えられる。

一方で、徳島大学内の防災に関する項目について十分と感じるか不十分と感じるかを質問した際の回答を示した図3を見ると、いずれの項目においても黒枠で囲んだ「不十分だと思う」あるいは「どちらかというと思う」という回答が高い割合を占めていることがわかる。また「防災設備」や「大学が持つ災害対応に関するノウハウ」の項目においては「どちらかというと思う」の回答も見られる。

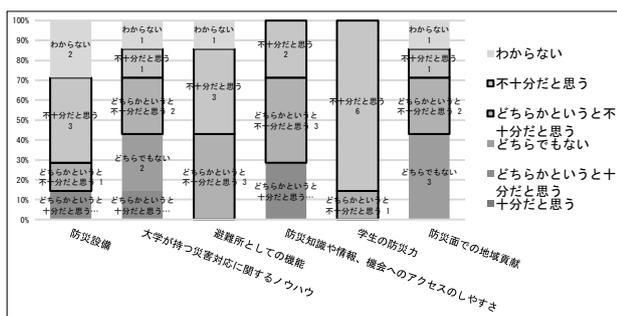


図3 徳島大学の防災についてどう感じるか(n=7)

4. 私たちの気づき・学び

アンケート調査を通して自分自身の防災意識を高めようと考えている学生に関しては、五月祭のような実体験を伴う防災活動や経験が効果的であるとわかったものの、そういった体験をしたと考えている学生は、体験内で多くのことを吸収しようという姿勢で臨むため、そもそも防災意識が高いと見なせるだろう。今年度前期に開講していた「防災・減災基礎」の授業では、防災士の資格を取るため先生方の話を聞く学生がいる中、雑談や居眠りをしている学生も目立った。また後

期に開講している「防災・減災の実践」に参加している学生は、毎授業積極的にアクティビティに参加しているものの、担当の先生からその授業は定員割れだったと伺っている。今後課題になるのは、防災意識がほとんどない、あるいは持とうとしていない学生の防災力向上の方法だと考える。図3の結果を見ると、大学内の防災設備やノウハウはあっても、学生がそれらに関わる機会が少ないことも学生の防災力の低さにつながっているように感じるため、大学の授業や専用のプログラムを用意して学生が防災教育を受けられる場所を増やすほか、学生側からも、てくとの活動やその他の委員会やプロジェクトの活動を通して「防災」というコンテンツそのものの学生に対する露出の機会、例えば学内のイベントへの出展やチラシの掲示・配布の機会を増やし、「実際に体験をする」ところまで引き込む必要があると考える。

5. 結論

大学内の防災には様々な機関の連携が必要不可欠である\*3。しかし大学の通常の業務に加え、さらに大学内の組織構造の垣根を越えて、災害という緊急時の対応策を用意するのは非常に困難が多いと考えられる。てくとをはじめとした徳島大学内で防災に関係する活動を行っている学生団体が主体となって横断的な取り組みを行えば、より一層活発な議論が可能になると考える。日中の多くの時間を過ごす大学という場所において、防災教育や災害時に備えた仕組みづくりに学生が関わることや、学生が学生のために防災に「触れる」機会をつくることは、徳島大学の防災力向上のために非常に意義のあることだと考える。

6. 引用・参考文献

\*1 内閣府 (2012). 「各都府県で死者数が最大となるケースの死者数内訳」.  
[https://www.bousai.go.jp/jishin/nankai/taisaku\\_wg/pdf/20120905\\_06.pdf](https://www.bousai.go.jp/jishin/nankai/taisaku_wg/pdf/20120905_06.pdf). 2024年10月27日.  
 \*2 内閣府 (2022). 「防災に関する世論調査」の概要」.  
<https://survey.gov-online.go.jp/r04/r04-bousai/gairyaku.pdf>. 2024年10月27日.  
 \*3 徳島大学環境防災研究センター (2023). 「令和5年度大学 ABCP の活動報告」